

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

魔法少女と光纏う者

【作者名】

kurokuruki

【あらすじ】

某年某月俺は呆気なく死んだ　　と思ったらテンプレな転生だった。

これは魔法少女達と一人のディセンドーの力を手にした転生者の物語である

初書きなので変なところがあればご指摘してくださいと嬉しいです。

物語は無印からのスタートとなります。

プロローグ

某月某所

大学の講義が終わり俺はいつもの様に駅で電車を待っていた。

すると隣にブツブツと何か独り言を呟く男が並ぶ。

気味が悪いと思っていると男がこちらを向いて笑いかけると同時に爆発し、視界が真っ白に染まった。

それが俺の最期に見た光景だった……

気がつくとき白い空間に俺は立っていた。

「何処だ……」

記憶が確かであれば俺はいつものように帰路につく途中で変な男に笑いかけられたと思ったなら白い光に包まれた……はずだ。

しかもこの時点で嫌な予感がしていた。まるでいつも読んでいた神様転生と同じじゃ……

「「」名答」

ふと振り向くと白いローブを被った金髪碧眼の可愛らしい幼女がいた。

「ん？疲れているのか俺は。起きたら謎空間にいて心を見透かす幼女に話しかけられるとか……」

「ハア……残念だけど現実だよ。テンプレ乙」

まさか小説の世界で見ていたモノが現実になるなんてなあ……まさかとは思つが俺の死もテンプレじゃ……

「そのまさかだね。お察しの通り私は神様だよ。」

そう言つと幼女は決まり悪そうな目で俺を見ながら続けた。

「私の持つてる人類リストってのがあるんだけど死ぬ人間をシュレツダーにかけて生命をリセットするんだ。それで昨日、神達の飲み会で酔い潰れた私がまだ死期が遠かった君を間違つてシュレツダーにかけてしまったんだ……神のルール上消した生命は元に戻せないんだ……」

「酒に酔い潰れた挙げ句にこの駄幼女は何をしてくれたんだチクシヨウ……」
「ウー……」
「……」

「何をやるダァ　！それでこれからだけど、転生先はリリカルなの

はの世界だよ。転生特典は何を希望する？」

話を逸らすなよ……転生先はリリカルなのはか。

俺はアレの二次創作しか見たことがないんだが、大丈夫だろう……多分

一応転生特典は決めている。一時期ハマったあのゲームならいいか。

「ならTOW2のディセクターの力であとは……」

「なら制限を付けるね？」

駄目少女との話し合いの結果以下の特典になった。

1：魔力Sランク（普段はリミッターがあり、通常はBランク）

2：TOW2の職業、秘奥義の習得（初期は基本職のみでゲーム同様にLvが上がれば上級職が解放される）

3：オーバーリミッツ時は各職のレディアント装備になる。オーバーリミッツは一定時間後に使用可能になる

4：インテリジェンスデバイス（ユニゾンデバイス）はカノン。職のLv は彼女を通じて確認できる

5：職は自分の意思で切り替えが可能。術（補助系のみ）は切り替え後でも持続する

6：TOW2の全ての武器防具（最初は制限付き）と道具の使用可

とまあこんなところだろうか。ゲームのシステムがほぼそのままだなコレ。

「さてと、特典も決まったところで早速転生でーす！じゃあ赤ちゃんから頑張ってるね」

「なんでさあアアア!？」

激励を受けながら俺は光に包まれて意識を手放した。

プロローグ'裏'

「これでおしまいっ」とー」

そう言いながら彼女は近くにあった真っ白なソファに倒れこむ。

「あ、そうだー彼には1つボーナスを与えないとねー!」

彼女は何も無い空間に手をかざして名簿を取出して何かを書き込んでいく。

「さてと。数多くの転生者の中でも珍しい特典を選んだものだね彼は。それが吉と出るか凶と出るか…」

彼女は名簿を見ながら年相応に似合わないくらい不気味な笑みを浮かべていた。

「まあ、物語を作るのは私ではなく彼だから今後どうなるか楽しみにしておくかー!」

勢いよくソファから飛び起きて上を見上げながら背筋を伸ばす彼女。それは見た目と同じくかわいらしいものだ。

コッ、コッ、コッ

近づく足音がしたので彼女は誰が来たのかと思っていると

「じんの、バッカモンー!」

いきなり拳骨で思いつきり殴られた。神だとはいえ痛いものは痛い。あまりの痛みにつずくまって悶えていると、彼女と同じローブを

着た立派な白髭の白髪の老人がしゃがみ込んで話しかけた。

「報告もせずは何をしとるか！」

「な、何をするダア　　!?!」

「バカモン！お前のミスでわしの仕事を余計に増やす羽目になったんじゃぞ！それになんじゃ！酔った勢いでリスト削除する神なぞ聞いたことがないぞー！」

「も、申し訳ないです…上位神様」

思わず泣きそうな顔をする彼女に老人　　上位神は思わずため息をついた。

「まあ、とりあえず今後このようなことを起こすでないぞ！今回は日頃から良く働いているからそれに免じて許すがの。2度目は無いぞー？」

「は、はいー！」

「彼も無事送り出したんじゃろう？特典には興味はないがの。」

「はい…」

「まったく、しかも死に方もひどいもんじゃ…自爆テロで巻き込まれて死ぬとはの…かわいそうじゃの…」

「もうやめてくださいよ！私の精神的なLPはもう0ですよ!?!」

「では、わしは先に集会に戻る。お前も早く来るんじゃぞ。くれぐれも、余計なことはするんじやないぞー！」

そう言つと上位神は光の粒子になって消えた。

「はあ…」

彼女は変な声を上げながら首をコキコキと鳴らし、背伸びをする。そして先程送り出した転生者のいた場所を見つめる。

「君の選んだ道は前世と同じく厳しいものかもしれない。それに”彼”も出てくるだろうしね。それでも私は

「君の人生に幸あれと願っているよ」

そういつて彼女は振り向くとその空間から跡形もなく消えた。

かくして魔法少女と世界樹の子との物語は始まる。

そして神様が追加した特典の事を彼は知る由もない。